

本書の構成は次のようになっています。

序説編

物質名詞について（序説1～4） p 8 ～

抽象名詞について（序説5～8） p 12 ～

本編

不定冠詞（a / an）について（不定冠詞1～3） p 16 ～

定冠詞（the） ⇒ 目次は次頁から p 19 ～

特集編 ⇒ 目次は『目次5』 p 102 ～

出典 p 184 ～

英語索引 p 206

日本語索引（文法用語以外のもの） p 207

文法用語の索引 p 208

引用文献 p 209

定冠詞 (the) の分類

1. その場の状況などによるもの

その場の状況 (= 外界照応) やお互いの関係などから、相手にもすぐにそれと特定できるもの
(その場から見えるものとは限らない)

Did **the children** behave today? (今日は子供たちは行儀がよかったですか。)

Can you draw me a map showing the way to **the post office**? (最寄りの郵便局)

2. 前後の文脈によるもの

i. 前出した内容と呼応するもの (= 前方照応)

More than 1,500 cases have been reported nationwide, and 25 persons are known to have died from **the condition**. (全国で1,500件を上回る症例が報告され、25人がすでにこの病気で死亡したことが分かっている。)

"I beg your pardon, could you say that again more slowly." "Sure. I will also write **the information** for you."
「もう少しゆっくりと繰り返してもらえますか。」「いいですよ。話の内容も書いておきましょう。」

以下のように分類した上で解説する。

a. 前出の「名詞」と呼応するもの。

次の4パターンの名詞に the を先行させる例がこれに該当する。

a-1. 前出の名詞をそのまま繰り返して用いる名詞

a-2. 前出の名詞の代りとして用いられる名詞 (= 言い換えられた同義・類義の名詞)

a-3-1. 前出の名詞によって特定・限定される名詞

3-2. 前出の名詞によって連想的に理解・推測などを行うことができる名詞

b. 前出の「文脈」と呼応するもの

前の「文脈」から自ずと (あるいは連想的に) 理解・推測などを行うことができる名詞に the を先行させるもの

ii. 後出する内容によって特定・限定されるもの (= 後方照応)

She didn't have **the time** to do it herself. (彼女にはそれを自分でやるだけの時間がなかった。)

I didn't like **the way** he spoke to us. (我々に対する彼の口のきき方)

3. 定冠詞と名詞が一体として用いられる傾向が強いもの（を中心とした例）

（この傾向が強いものほど、定型的・画一的・紋切型的な用例となる。共通認識が容易に得られるか、お互いが具体的な知識を有するので、名詞と、それについての同定を求めるための定冠詞との「結びつき・親和性・一体性」が極めて強いと言える。）

この範疇における定冠詞の働きには次のようなものがある。

- i. 類似のものから区別し、ときに強く対比させる。
 - a. 類似のものが三つ以上ある中で、一つだけを抽出し区別する。
 - a-1. 「定型例」（例： I took her by *the hand*.)
 - a-2. 「個別事例」
 - b. 対照的な二つのもののうち的一方であることを表す。
- ii. 標準モデルを想起させる、あるいは典型的イメージを喚起する。
 - a. 主語以外に「the + 普通名詞の単数形」を用いて、標準モデルを想起させる、あるいは典型的イメージを喚起する。（製品・楽器・道具名など）
 - b. 一般的な総称表現
 - c. 抽象的な概念や隠喩を表す。
 - c-1. 「the + 普通名詞（の主に単数形）」を用いて
 - c-2. 「the + 形容詞」を用いて（ある特質を有する人々を指す例もここに含める。）
- iii. 唯一性を示す、強調する。（固有名詞的な性格のものを中心とした例）
- iv. 全体をひとまとめにする。（複数の構成要素をひとまとめにすることが特に多い。）
- v. 地理的名称に関して――

「長大なものや広域にまたがるもの」には the が先行する。

あるいはまた、感覚的にはその境界を認識しにくいものに対して、実際には境界があってその範囲は有限であることを示す意味で the を先行させる。
- vi. 限られた場所や空間などの一部であることを表す。（in front of と in the front of の違いなど）

あるいは、看護・監督・支配などを受けている状態にあることを表す。（in charge of と in the charge of の違いなど）

なお、全体について言える基本ルールとして、A of B の形をした固有名詞（普通名詞から派生した固有名詞）には the を先行させるのが普通である。

この範疇の用法は「類似のものから区別し、ときに強く対比させる」だけでもほぼ説明はつく。つまり、より単純化すれば ii～vi も i に収斂できるわけだが、やはりこれらは別に覚えていた方が便利である。

ii は i が総称的あるいは抽象的な意味を帯びるように深化したもので、iii は唯一性・固有性を強調するように深化したものである。iv もよく使う用法である。v は視覚的なイメージを描きやすく有益と思われるので、ひとつの覚え方として入れた。vi は特におもしろい使い分けである。

4. 「唯一性」を明示するためのもの（文脈やその場の状況で the が選択されるもの）

（3. で述べたような the と名詞の間の「結びつき・親和性・一体性」がもたらあるわけではなく、文意を根拠に the が置かれる点が 3. iii とは大きく異なる。4. ii では不定冠詞を置くこともあるが、定冠詞か不定冠詞かの選択が文意を大きく左右する。）

i. 他に代る存在が無いために、絶対的に唯一の存在となるもの（不定冠詞には置き換えられない。）

He is **(the)** *principal of our school*. (我々の学校の校長先生)

He is **a** *principal of our school*. は通常はありえない文である。

※ 『5. 意図的に強調するためのもの』の一部も、「他に代るものがないもの」と考えればここに含めることもできよう。

He's **the** *man for the job*. (彼はその仕事に適任だ。)

This is **the** *drink* for hot weather. (これこそ暑い時の格好の飲み物だ。)

ii. 同等のものが複数存在する可能性も通常はあるが、「この場合には唯一のものとなる」ことを明示するためのもの（不定冠詞を用いれば意味が異なる。）

He is **the** *victim of that crime*. (唯一の犠牲者) He is **a** *victim of...* なら「犠牲者のひとり」

He opened **the** *door to success*. なら、成功する方法は一つしかないが、**a** *door to...* なら複数ある方法のうちの一つ。

ii で「この場合には唯一のものとなる」と判断するには文脈が必要なことが多いため、これを次の3項目に分けて記述する。

a-1. 「唯一のもの」と言える例（共通認識がある場合）

-2. 「唯一のもの」と言える例（共通認識がない場合）

b. 文脈によっては「唯一のもの」とは言えない例

5. 意図的に強調するためのもの

比較的弱い強調

He was **the** *son of a doctor*. (彼は医者の子だった。)

He hid himself in **the** *corner of his shop*. (彼は店の片隅に身を隠した。)

比較的強い強調

The *arrogant bastard!* (あの高慢ちきめ。)

The *impudence of the fellow!* (奴のあつかましさと云ったら。)

『特集編』の目次

- 特集 1 関係詞節と冠詞
- 特集 2 「数」とは無関係の、話題や情報を新たに提示するための不定冠詞
- 特集 3 前方照応の the と「強調」のための the、あるいは「唯一のもの」を表す the
- 特集 4 「発信者がそれを始めて知ったか否か」や「それが世間に知られているか否か」を判断基準とする例、
あるいは「『既存のもの・これまでに実際にあったことか』か、それとも『存在しないもの・これからのことか』」
を判断基準とする例
- 特集 5 動名詞と冠詞
- その1 動名詞と冠詞 5-1～
- その2 動名詞と名詞の使い分け 5-5
- その3 動名詞と名詞、そのニュアンスが異なる場合 5-6
- 特集 6 所有格と冠詞の違い
- 特集 7 序数詞と冠詞
- 特集 8 最上級と the
- 特集 9 相対最上級・絶対最上級と冠詞
- 特集 10 複数形の名詞と the
- 特集 11 名詞の単複の選択例
- その1 英単語の単複 11-1～
- その2 英語と日本語の違い 11-14～
- 特集 12 冠詞等を反復させるか否か
- その1 冠詞等を反復させない例 12-1～
- その2 冠詞等を反復させる例 12-5～
- その3 その他の注意点(繰り返すか否かで意味が異なる例など) 12-7
- その4 and 以下の冠詞等の有無による修飾・被修飾関係の判断 12-8～
- その5 **the first and the second chapter = the first and second chapters**
 のような、and が形容詞をつなぐパターンについて 12-10～
- 特集 13 冠詞を省略する例としない例
- ① 主に成句的な表現において、通常の文脈では定冠詞を省略しても差し支えない例 13-1
- ② 主に成句的な表現において、定冠詞もしくは不定冠詞を通常は省略する例 13-2～
- ③ 冠詞を省略しない例 13-5～
- ④ 定冠詞・不定冠詞・無冠詞の違いで意味が大きく変わる例 13-7～
- 特集 14 人名・肩書き等と冠詞
- その1 補語の例など 14-1～
- その2 固有名詞との併記例など 14-4～
- 特集 15 「The 比較級 ..., the 比較級....」の構文に関する注意点
- 特集 16 病名・症状名と冠詞

3. i. a. 類似のものが三つ以上ある中で、一つだけを抽出し区別する。

3. i. a-1. 定型例

この種の用例は極めて多く、中でも以下に挙げるような例の使用頻度は高い。

【 身体部位 】

He took me by *the hand* [*the arm, the shoulders*]. (手をとった [腕をとった、両肩をつかまえた]) 注1・2

この表現は目的語に *me* を置いていることから「行為を受ける人」を重視したものである。

He took *my hand*. の方が表現としては普通だが、こちらは「身体部位」に重きを置くことになる。

【 単位 】

hire [pay] a worker by *the hour* (時間ごめ [時給払い] で労働者を雇う)

時の単位もいろいろとあるが、その中から *hour* が選択されたということである。

数の単位も様々なので、他の単位と区別するために *the* を置く。 be sold by *the dozen* [*the hundred, the thousand, etc.*]

「千をもって数えられる」なら be counted by *the thousand* [*in thousands, by (the) thousands*] と複数形にもできるが、複数形だと、千ずつのかたまりが積み重ねられていく感じである。

重さ・長さ・容積についても、by *the kilogram*, by *the meter*, by *the liter* のような例が多用される。

ここで注意しておきたいことは、上のような単位を下位区分とするならば、上位区分たる重さ・長さ・容積、すなわち *weight, length, volume* [*size, bulk*] については、例えば *Sugar is sold by weight*. 「砂糖は重さで売られる」のように無冠詞で用いられることである。注3

「〜につき (each)」「〜ごとに (every)」の意の *a/an* の前に *by* は置かないが、*by the ...* の *by* もまれに省略される。

A spoonful of this medicine three times *a day* should help to stop the diarrhea.

(この薬をスプーン1杯1日3回飲むと下痢はおさまるでしょう。)

It costs eight pounds *an ounce*. (値段は1オンス8ポンドだ。)

これらの例の *a* は、*each, every* の意の形容詞として働くために *by* は置かない。

Potatoes are sold at 50 pounds *the sack*. (ジャガイモは1袋50ポンドで売られている。)

これはイギリス語での用法で、米語では *a sack* が普通。(『ジーニアス英和大辞典』より)

【 春夏秋冬 】 注4

These seeds germinate in *the spring*. (これらの種子は春に発芽する。)

四季を言う場合に *the* を置くのも、他の季節との区別・対比を明確にするためである。

その季節の気候・特徴などを言う場合には *the* は不要となる。(ただし米語ではこの場合にも *the* を置くことが多い。注5)

Spring is late this year and it's still chilly. (今年は春が遅れていてまだ寒い。)

【 朝昼晩 】

in *the morning*, in *the afternoon*, in *the evening* 注6

他方、朝・昼・晩にとる食事はふつうは無冠詞。注7

have [eat, take] breakfast [lunch, supper, dinner]

【 現在・過去・未来 】

in *the past*, in *the present*, in *the future*

この場合の過去・現在・未来は「時間の巾」を有し、「点」ではなく「線分」として意識される。三者択一になるため対比性は強く、そのために *the* が置かれる。注8

【 東西南北 】

The window opens to *the north* [*the south, the east, the west*]. (窓は〜に向いている。)

四者択一あるいは二者択一的な区別を特に強調しない例や感じさせない例では無冠詞。

The range of the strata is *east and west*. (地層は東西に延びている。)

The river flows from *north to south*. (その川は北から南へ流れる。)

3. i. b. 対照的な二つのもののうちの一方であることを表す。

例えば「前者・後者」を *the former / the latter*, *the one / the other* で表すときの *the* はこれに相当する。前者も後者も特定されるものだから *the* を置く。

これに対して、二つのものの中から任意の一つを選ぶとき、最初に選ばれる方は特定されないで無冠詞の *one* であり、残された一つは選択の余地がなく、必然的に特定されるために *the other* となる。Which is *the bigger half*? でも、大きい方は必然的に特定されるのだから *the* を置く。I gave him *half*. では特定されない半分なので無冠詞だが、*the other half* なら必ず *the* が必要で、*other half* とするのは間違いである。

また三つ以上の場合、最初のもが選択された後に残されたものが二つ以上となっても、次の選択肢は特定できないので *another* である。*another* はもともとは *an other* であったことを知れば、その区別は容易であろう。

また *the majority overrules the minority* 「多数が少数を押し切る」では多数派と少数派が対置される。他方、そのような意識がなく、ただ漠然と言う場合には不定冠詞が置かれる。

A majority voted for [against] *the bill*. (大多数がその法案に賛成 [反対] の投票をした。)

Only *a minority* (of people) want(s) *the war to continue*. (戦争の続行を望むものはごく少数である。)

In our family *the males have never been as good as the females*. 「うちの家系は代々、男より女の方が出来がよい」における *the* は、*our family* を受けて「うちの家系の」と限定しつつ男と女を対比させるが、さらに『3.iv. 全体をひとまとめにする』働きもしている。

以下に、対照的な二つのものを表す例を続ける。

the beginning and the end *the ideal and the real* *the carrot and [or] the stick* (あめとむち)

the taller of the two Which came first, *the chicken or the egg*? (鶏と卵どちらが先か。)

Keep (to *the*) Right (『右側通行』) *the excesses of the Right and the Left* (極右と極左)

in *the dark* (暗がり) / in *the light* (明るいところ)

In *the heat and in the cold*, I have a smaller appetite. (私の場合、暑さにつけ寒さにつけ食欲が減退する。)

the opposite sex (異性) *the back of a spoon* (スプーンの背) *the reverse side of a coin* (コインの裏面)

the North Pole 「北極(点)」 *the North Star [the polar star]* (北極星) *the Arctic Circle [zone]* (北極圏)

cf. *a polar [an Arctic] expedition (team)* (北極探検隊)

the Younger Smith = Smith the Younger (息子の方のスミス)

cf. (the) young Greene (息子の方のグリーン) young Greene は「若々しいグリーン」「若き日のグリーン」とも解釈できる。

young Mrs. Palmer (パーマーさんの若奥様) (この cf. は『ジーニアス英和大辞典』からの抜粋。)

Do you prefer *the country to the town*? (町よりも田舎がお好きですか。)

I live in *the town*, but my parents live in *the country*. (私は町に住んでいるが、両親は田舎に住んでいる。)

the line that divides the Communist from the non-Communist world (共産圏と非共産圏を分ける国境線)

The child, again, can educate the teacher. (学童の方もまた教師を教育できる。)

differences between *the East and the West* (東洋と西洋の違い)

The polarization between the positions of the North and the South cannot be reconciled.

(北と南の立場が二極化してしまっている状態は和解できそうにない。)

強調しなければ *the* は省略される。bring East and West closer together (東洋と西洋をもっと親密にする)

latent tension between North and South (南北間の潜在的な緊張)

The larger cars hug the road better than the small cars. (大きな車の方が小さな車よりも走り具合に安定感がある。)

Failure is *the rule*, success *the exception*. (失敗が常態で、成功は例外である。)

When poverty comes in at *the door*, love flies out at *the window*. (諺：金の切れ目が縁の切れ目。)

Is hate *the antithesis or a corollary of love*? (憎しみは愛の正反対のものか、それとも愛から生じる一つの結果なのか。)

Growing up today involves considerable tension between *the crowd and the person*.

(今の時代には、成長過程において、集団と個人との間のかかなりの緊張関係を強いられる。)

More and more people are now suffering *the psychological (if not the physical) pain of prolonged terminal illness*.

(末期の病状が長引くことによって、身体的な苦痛はさておき、心理的な苦痛に多くの人々がさいなまれている。)

A good place to start the analysis is the balance between *the individual and the group*.

(個人と集団の軽重について考えることからその分析を始めるのがいいだろう。)

あるいはまた「新・旧」を言う場合も、この範疇に含めることができよう。

the Old Continent (旧大陸) *the New Continent* (新大陸) *the new Administration* (新政府)

the old colonial administration of India (インドのかつての植民地統治)

「資産をもっている人たち」のことを *the haves* と言うことがある。通常は *the* を置くのだが、これは *the have-nots* 「資産のない人たち」との対比が意識されるためである。なお *the haves and (the) have-nots* では、*the* を繰り返す方が区別・対比をより強調する。

③ *A dolphin* is an intelligent mammal. の表現形式について

Any dolphin 「イルカというものはどのイルカでも」の意で、一つのことを代表として取り上げ、その種に共通の性質を述べる。one の視覚的なイメージを抱かせやすいために、表現効果を生むこともあるが、逆にそのために、この表現形式を用いてはならない場合もある。注2

主語の例

A baby deer can stand as soon as it's born. (鹿の子は生まれた直後から立つことができる。)

A dog is sometimes a dangerous animal. (犬は時には危険な動物である。)

A spider monkey has long limbs. (クモザルは手足が長い。)

A caterpillar transfers itself into a butterfly. (毛虫は蝶に変身する。)

A horse takes a new rider's measure by the fitness of his seat. (馬は初めての乗り手の馬術を、腰の座り具合で判断する。)

An acorn grows into an oak. (ドングリひと粒がオークの木になる。)

A ripe peach can easily be peeled by hand. (熟した桃は手で簡単に皮がむける。)

A dictionary gives information about words and phrases. (辞書は語句についての知識を提供する。)

An old car is liable to eat oil. (古い車はオイルを食いがちだ。)

It came from the days when *a motor car* was a novelty. (自動車はまだ珍しかった頃にその由来はある。)

A uniform may provide a sense of identification with the school community.

(制服は、学校という社会との一体感を作るかもしれません。)

A rescue team needs to be cool but quick. (救助隊には冷静さと機敏さが要求される。)

A computer is intelligent to the extent that it can store and retrieve information.

(コンピュータは情報を蓄えたり検索したりできるという点では知的である。)

A ground station retransmits television signals that it receives from satellites.

(地上局は衛星から受信したテレビ信号を再発信する。)

動物・植物・物などに関しては、このように一頭・一匹・一粒・一個について、個々の具体的な様子をイメージさせる状況にあっては、複数形にするよりも効果的である。

例えば、*A cork* floats on water. 「コルクは水に浮く」と *Corks* float on water. では思い浮かべる光景が異なるものとなるはずだが、ほとんどの人が1個のコルクのイメージの方を好むのではなからうか。(また、*Cork* floats on water. なら「コルク材は水に浮く」で、*Corks* popped at the dinner. は「晩餐では盛んにコルク栓が抜かれた。」)

A water molecule is formed by one oxygen atom and two hydrogen atoms. 「水の分子は1個の酸素原子と2個の水素原子から成る」でも、*Water molecules* are (each) formed by.... とするよりも簡潔で効果的である。(「配分単数」の考え方に従えば、この each は省略できる。「配分単数」については『特集11-3』を参照されたい。)

また *Always take the trouble to consult a dictionary for the meaning of a word.* でも、「ある言葉 (a word)」の意味くらいなら普通は一冊の辞書を調べるだけで十分なので、複数形にすることもあるまい。

他方、そのイメージゆえに、この表現形式が用いられないことも多い。簡単な例だが、例えば *Potatoes* were introduced by the Spaniards from America into Europe. を *A potato* was.... としたなら、持ち込まれたジャガイモは1個だけだったことになってしまう。不定冠詞は one とは完全には同義ではないものの、*An apple a day keeps a doctor away.* 「一日にリンゴ一個で医者いらず」の例のように、one の意を表すこともやはり多いのだから、使える状況に限られるのは当然である。

次の例も同じく不可である。× *A tiger* is becoming almost extinct. ⇒ 『the 3-19』

『英語冠詞の世界』(織田稔:研究社)では、「*A beaver* is found in Canada. では確かにつつまが合わない」としている。

「絶滅しつつある」あるいは「普通に見られる」という、ある程度の個体数が存在してはじめて成り立つ事実を *A ...* で言うのは、非常に奇異な感じを与えてしまう。(仮にこれが、ビーバーが絶滅したと思われていたところ、*A beaver* was found in Canada. という事実があったというのなら、この方が正しいのだが。)注5

また、「ジャガイモは南米が原産地だ」と言うときには、*Potatoes* are native to South America. もしくは *The potato* is.... で表現し、*A potato* is とは普通はしない。敢えて1個のジャガイモを代表として取り上げてこのように表現すべき積極的理由は何もないからだ。

この表現形式では、「一部にはそういうものがある」ことを表して some や a certain の意に通ずる例もある。

A school may not permit a high-school student to ride a motorbike even when the parents have given permission.

(高校生のバイクについて親が許可しても学校が許可しないことがある。)

3. ii. c. 抽象的な概念や隠喩を表す。

3. ii. c-1. 「the + 普通名詞 (の主に単数形)」を用いて

例えば *the spring of life* 「人生の春 (青春時代)」 *act the man* 「男らしく振舞う」 *play the fool* 「馬鹿みたいに振舞う」といった直喩表現、あるいは *do the room* [*the roof, the dishes, the flowers*] 「部屋の掃除をする、屋根の修理をする、皿を洗う、花を生ける」といった例は直截的でわかりやすい。そしてこれが、*from the cradle to the grave* や *the ABC of Science* といった例になると「ゆりかごから墓場まで」「科学のABC」といった直訳も可能だが、意味するところは「一生を通じて」「科学入門」であって隠喩的でもある。また名詞に限らず、*I was on top of the world.* 「天にも昇るような気分だった」や *The remittance is now on the way.* 「金はもう送金した」といった熟語の例も、ここに含めて理解していただろう。

以下も、「the + 普通名詞」が抽象概念的なものを表したり、隠喩的に働いたりする例である。注1

the afternoon of life (晩年) *be afraid of the knife* (手術を怖がる)
the region beyond the grave (冥土) *the dread of the grave* (死の恐怖)
the carrot and the stick 「報酬と罰 [あめとむち]」
follow the plow (農業に従事する) *follow the stage* (俳優を職業にする) *follow the sea* (漁業に従事する)
show the flag 「旗幟鮮明にする = 自分の主張・見解や (どちらの側につくかなどの) 態度をはっきりとさせる」

The pen is mightier than the sword. (文は武よりも強し。)

He is at home in *the saddle*. (彼は乗馬に慣れている。)

Stripes are *the thing* in this season. (今季は縞柄が流行だ。)

England was *the cradle* of the industrial revolution. (イングランドは産業革命発祥の地であった。)

Which is better, *the breast or the bottle*? (母乳と粉ミルクのどちらがよいですか。)

the bottle は「酒」を指すことが多いが、この例文について『冠詞英語の世界』(織田稔: 研究社)では「『女』か『酒』か、ではない — 念のため」としている。cf. *Ware the bottle!* (飲み過ぎるな。)

She is *the (very) soul* of honor. = *She is very honorable.* (彼女は高潔そのものだ。)

There is very little of *the animal* in him. (彼には動物的なところがほとんどない。= 品のある人間だ。)

Under their protection, we can live reasonably peaceful lives and develop the better part of ourselves — *the angel* and not *the beast* in us.

(それらの保護の下で、我々はそれなりに平穏に暮らし、自己の良い部分、つまり猛々しい面ではなくて優しい面を培うことができる。)

While normally a gentle person, drinking brought out *the brute* in him.

(彼はいつもはおとなしい人なのに、酒が入って獣性がむき出しになった。)

Japan rose from *the ashes* of defeat. (日本は敗戦の傷跡から復興した。)

the thunder of an accusation (告訴という威嚇) または (告発を求める怒号)

The college has been *the nurse* of many famous men. (その大学からは多くの名士が輩出した。)

Sports are *the nurse* of friendship. (スポーツは友情を育むものだ。)

His books were *the children* of his brain. (彼の書物は彼の頭脳が生み出したものだった。)

the mother of all slush funds (全買収資金の出所)

The mother in her awoke. (彼女の母性本能が目覚めた。)

All *the father* rose in my heart. (父親の情が胸にわき起った。)

Ignorance is *the parent* of many evils. (無知は多くの罪悪の元である。)

cf. *The wish is father to the thought.* 「願っているとそれが本当のように思えてくるものだ」のような無冠詞の例もある。

また、*the mind* や *the head* が「知力・知性・思考力」を意味し、さらには「(知性面からみた) 人」の意も表すといった例、あるいは *mortal* 「やがては死すべき運命の」といった形容詞までもが、不死の神とは対照的な存在としての人間を指す名詞に変化した例なども、この範疇において理解することができよう。

この範疇における *the* の働きは、その語の派生的な意味を強調するためのものだが、日本語でもこのような比喩表現は多いし、英文の直訳がそのまま日本語としても定着したのものもあるので、比較的容易に理解できるものと思う。

そしてこのような場合の普通名詞は純粹に客観的かつ即物的な (そしてしばしば無味乾燥な) ものを指すのではなく、抽象的な意味合いを帯びる。例えば「我々のチームは最下位である」を *Our team is in the cellar.* と言えば、*the cellar* はもはや単なる「地下貯蔵庫」ではない。そしてこの方が *Our team is lowest in rank.* と言うよりは詩的であり、視覚的なイメージを喚起しやすい。

例えばまた、日本語でも「それはまったく見当違いだ」を「的はずれだ」と隠喩で言うが、この範疇に該当する *the* は、簡単に言えばそのような場合に用いられる *the* である。(ちなみにこれは、英語でも *That is quite beside the mark.* と表現できる。)

また、このような *the* の働きは、「the + 形容詞」で抽象概念を表すことと通底するものがある。

(例: *the beautiful* = *beauty* ⇒ 『the 3-35』)

3. iv. 全体をひとまとめにする。(複数の構成要素をひとまとめにすることが特に多い。)

この用法は頻繁に用いられ重要なため、(重複する部分は多いもの)『特集10』でも詳述している。

この用法に関連するものとして多くの文法書に載せられているのは「複数形の固有名詞には the がつく」といった類の記述である。しかし実際には、この用法は固有名詞以外にも幅広く適用され、また単数名詞についても同じように働くことがある。したがって敢えて固有名詞に関して言うとするれば、「複数形の固有名詞に対しても、全体をひとまとめにするための the を先行させる」ということになる。

つまり、次の3つのパターンにおいてこの働きは見られる。以下、この順に例を挙げていくことにする。

- ① 複数の構成要素からなる固有名詞の例
- ② 普通名詞の複数形の例
- ③ 単数形の例

なお、固有名詞の所有格によって複数名詞が修飾されてもこの用法は適用されない。例えば Dickens's novels や Eliot's letters は無冠詞である。(the novels of [by] Dickens や the letters of [by] Eliot と表すときには the を置く。)

⇒ 『the 3-13』の『注14』

固有名詞や代名詞の所有格は名詞を強く特定・限定するものなので the との併用はしない。しかし、普通名詞の所有格の場合はこの限りではない。その説明には the party's promises 「その党の公約」のような例を持ち出すまでもないだろうが、このような例の the は、すぐそばにある名詞 (party) を修飾するというのがその主な働きなので、全体をひとまとめにしているという感じはかなり弱くなる。

全体をひとまとめにして言うつもりも無く、区別・対比を強く言うつもりも無いのなら the を置く必要はない。

Arabic numerals (アラビア数字) Roman letters (ローマン体) Japanese classical performing arts (日本の古典芸能)

また、複数の構成要素からなる地理的名称については複数扱いにするが、国名や組織の名称なら単数扱いが普通である。 ⇒ 『特集10-2』

The Golan Heights look down on Syria's Damascus plain. (ゴラン高原はシリアのダマスカス平野を見下ろしている。)

The Philippines offer a fine field for botanists. (フィリピン諸島は植物学者にとっては格好の植物採集の場である。)

The Philippines is one of the recipient countries of Japanese foreign aid. (フィリピンは……)

The Netherlands has been reclaiming farmland from water. (オランダは干拓によって農地を造成してきた。)

① 複数の構成要素からなる固有名詞の例

(2語以上からなる固有名詞は、例えば Tokyo Tower のように、それぞれの語の最初の文字を大文字にするのが普通である。)

国名

the Philippines 正式名は the Republic of the Philippines (フィリピン共和国)

the Netherlands オランダ語で nether は「より低い」を意味する。

the United States of America (アメリカ合州国) 注1

ちなみに「アメリカ大陸」は the (North and South) American Continents, the Americans だが、南北に分けずに一つの大陸と考えると the American Continent とすることもある。

複数形ではないが the United Kingdom 「英国」のような例でも、「全体をひとまとめにする」意味合いは込められている。

山脈

the Himalayas (ヒマラヤ山脈) the Alps (アルプス山脈) the Rocky Mountains = the Rockies (ロッキー山脈)

cf. the Matterhorn and (the) adjacent mountains (マッターホルンとその近隣の山々)

単独の「山」はその姿を一望できるために「全体をひとまとめにする」必要はなく、普通は the を置かない。

Mt. Everest のように Mount の略語の Mt. を置くのが普通であるが、ヨーロッパアルプスの the Matterhorn の例は、原語に従って the を置いている。英米以外の山の名では、このように原語に従う例もある。

また、the Alaska Range 「アラスカ山脈」や the Appalachian (mountain) range 「アパラチア山脈」などのように range で表記する例もあるが、それは『③ 単数形の例』に該当するものと理解されたい。

高原・高地

the Golan Heights (ゴラン高原) the Guiana Highlands (ギアナ高地)

the Shiga Heights (志賀高原) the Tateshina highlands (蓼科高原)

上記のような複数形の例は、山並みや谷などで分断された不連続な平面の集合体としてとらえる場合であろう。広大な一枚の面としてつながっている高原には、次のように plateau を用いた例が多い。

the Plateau of Tibet [the Tibetan Plateau] (チベット高原) the Iranian Plateau [the Plateau of Iran] (イラン高原)

the Ethiopian Plateau (エチオピア高原) the Deccan Plateau [the Deccan] (デカン高原)

平原など

the Siberian plains (シベリア平原) the Great Plains of the West (アメリカ西部の大平原)

the Western prairies (西部大草原) the Pampas (パンパス [パンパ] = アルゼンチンの大平原)

このような複数形は、「強意複数」(『特集11-5』)に近いものを感じさせる。

さてここからは、タイトル後半の「看護・監督・支配などを受けている状態にあることを表す」例の説明に移りたい。この例では「する側・される側」といった立場によって、定冠詞の有無が決まることになる。

代表的な例を二つ挙げる。

A is in *charge* of B. = B is in **the charge** of A [in A's *charge*]. (AはBを管理・世話している) 注1 (本頁下)

A is in *control* of B. = B is in **the control** of A. (AはBを管理・支配している)

Aの管理下にあるのがBであるが、Aが管理しているのはB以外にもあるかも知れないので、これを円錐状の空間に例えるなら、その頂部にあるのがAで、下部の空間に収まっているのがBである。Bの立場から見た場合には限られた空間にいることになるので **the** が必要となるが、この点において、前頁 **in the front of ...** の例と通底するものがある。

a nurse in *charge* of a patient (患者を担当している看護師)

Mother is in *control* of my family. = My family is in **the control** of Mother. (私の家では母が主導権を握っている。)

ただし文脈や常識、あるいは **under** などの前置詞の意味から、その関係に誤解を生じさせる恐れが無い場合には **the** を省略することもある。例えば A have [take] *control* of [over] B. や B is **under (the) control** of A. では、**the** に拠らずとも文意は明らかである。

a patient in **(the) charge** of a nurse (看護師に委ねられている患者)

The Parliament is **under (the) control** of the Labour Party. (議会は労働党の支配下にある。)

タイトル後半に該当する例についてのもう一つの便利な理解の仕方は、「『the+名詞+of ...』では of 以下の語が名詞の意味上の主語になる。他方、名詞の前に **the** を置かなければその名詞の意味上の主語は文の主語と一致する」ということである。(動名詞の場合には、その意味上の主語が文の主語と異なる場合のみ所有格や目的格を置くが、この場合は「the+名詞+of ...」でそれに相当する働きをする。)

in **the company** of a person = in a person's company (人と一緒に、人と同席して)

He seemed ill at ease in **the presence** of woman. (女性の前では彼は落ち着かないようだった。)

people in **the employment** of General Motors (ジェネラルモーターズ社に雇われている人々)

English has largely taken **the place** of French as a diplomatic language.

(外交語としておおよそ英語がフランス語に取って代った。)

cf. The assembly of the parts **takes place** in Taiwan. (その部品の組立ては台湾で行われる。)

In **view** of what you say, (あなたの発言にかんがみて)

in **the view** of the doctors = in the doctors' view (医者から見れば)

There's nobody to take **care** of this child. (この子の世話をしてくれる人は誰もいない。)

The children were left in **the care** of the housemaid. (その子らは家政婦に預けられた。)

make a pointed **criticism** of ... (〜に対して辛辣な批判をする)

make an honest **criticism** of ... (〜に対して偽りのない批判をする)

He made trenchant **criticisms** of her style of leadership. (彼女のリーダーシップの取り方に対して彼は辛辣な批判をした。)

challenge **the criticisms** of ... (〜からの非難に反論する)

overcome **the criticism** of the world (世間の非難を抑える)

Her attitude invited **the criticism** of her colleagues. (彼女の態度は同僚の批判を買った。)

ただし言うまでもなく、「する側・される側」といった立場が **the** の有無を決定する要素の全てではない。分野を特定する場合なども **the** が置かれる。

Hillary Clinton, who has led **the criticism** of the gaming industry in America, has recently come round to this view.

(米国のゲーム産業に対する批判の先頭に立ってきたヒラリー・クリントン女史は、……。)

The physician is well trained in **the care** of infants. (その医者は幼児の治療に熟達している。)

I entrust you with **the care** of my property. (私の財産の管理をあなたに一任します。)

注1 例えば **the love** of God は「神の愛」よりは「神を愛すること」と of 以下は目的語と解されることが多く、God's love と所有格にすれば「神の愛」と主語に解される。しかしながら、この一般的な区別はここでは無意味である。

特集 1 関係詞節と冠詞

関係詞節を用いたからといって、そのこと自体を (a / the / 無冠詞) の選択の根拠としてはならない。にもかかわらず、日本人の学習者は、関係詞節を伴った先行詞に対して次のような誤りを犯しやすい。

- 誤り① 関係詞節を伴えば、先行詞に対しては自動的に **the** を先行させなければならない。
 誤り② 関係詞節を伴った場合も、先行詞が唯一のものであれば **the** を、多数のものの中の一つであれば **a** を用いる。

① の誤りは初学者に多く、ある程度学習が進むと、今度は ② の誤解に囚われやすい。

「誤り① 関係詞節を伴えば、先行詞に対しては自動的に **the** を先行させなければならない」について

これについては何の根拠もない。それは、次のような例が多数存在することからただちに明らかとなる。

- He is **a serious man** who works hard and doesn't smile. (彼は熱心に働くが笑わない生真面目な人です。)
 An orphan is **a child** whose parents are dead. (孤児とは、両親をなくした子供のことである。)
A television program that educates can also entertain. (テレビの教育番組に娯楽性があることもある。)
 Bordeaux is **a wine** you can drink with many kinds of food. (ボルドーは色々な食べ物と合う種類のワインである。)

また、無冠詞の抽象名詞や複数形名詞などが関係詞節の先行詞となることもある。

- Gambling** which does not conflict with state law is authorized by city ordinance.
 (州法に抵触しない類の賭博が市条例によって認められている。)
 She held **views** on sexuality that were exceptional in that era. (彼女の性に対する考えはその時代には特異だった。)

ただし、区別や対比を明確にする必要があれば冠詞を置く。注1

- literature** that deals with our inner life (人間の内面生活を扱う文学) — 文学全般について言えること ⇒ 『the 3-7』の上
the literature that deals with our inner life (文学の中でも特に、人間の内面生活を扱うもの)

区別・対比性や限定的な性格が強い被修飾語に対しては **the** を用いるが、関係詞節による修飾がそれに該当することはあっても、これは特に「関係詞節だから」というわけではない。注2

- write in a diary **the things that happened that day** (日記にその日の出来事を書き入れる)
 his insight into human character and **the deeper things of life** (人間性ならびに人生の根底をなすものに対する彼の洞察力)
 I remembered **the pain I had gone through**. (前に経験した痛みを思い出した。)
 Vanilla extract will relieve **the pain of a grease burn**. (バニラのエキ스는油による火傷の痛みをとる作用がある。)

次に、「誤り② 関係詞節を伴った場合も、先行詞が唯一のものであれば **the** を、多数のものの中の一つであれば **a** を用いる」について

下の例のように、関係詞節を伴った例で「先行詞が唯一のものであれば **the** を、多数のものの中の一つであれば **a** を用いる」ことがあるのは事実だが、関係詞節を伴えば全てをそれで処理できると考えるのは間違いである。

- Mr. Kawabata is **the novelist who wrote this book**.
 Mr. Murakami is **a novelist who is popular with young people**.

「この本」は川端氏がただ一人著したものである。他方、若者に人気のある小説家は大勢いるが、村上氏はそのうちの一人である。

「誤り②」のように思い込んでしまう学習者が多いのは、このような例文を挙げて「誤り① 関係詞節を伴えば、先行詞に対しては自動的に **the** を先行させなければならない」を否定するだけの解説で終わってしまう文法書が多いことも一因ではなかろうか。上の例では「一人」か「複数人の中の一人」かが自明であるが、実際にはこのような単純明解な場面状況ばかりではない。

「先行詞が唯一のものであれば **the** を、多数のものの中の一つであれば **a** を用いる」という規則を適用できるのは、上のような社会常識的な共通認識がある場合の他、次頁に挙げるBのパターンのような場合についてであり、Aのような例には適用しにくい。

Bのパターンでは、先行詞の種類 (a book, the book, some books, the books) に関係なく、発信者とその相手との間に言わばプライベートな共通認識がある。他方、Aの例では、a book と the book で共通認識の有無に違いがある。

特集 5 動名詞と冠詞 その1 動名詞と冠詞

動名詞は「～をすること」といった行為を表すために抽象的に扱われて不可算であり、基本的には無冠詞である。これは例えば、**information** の原義が「**inform**すること」であり、そのために不可算・無冠詞になるのと同じである。(基本的な例文は注1に挙げる。) ところが実際には、普通名詞的な性格を強く有して、それには該当しないものも少なくない。そこでまず最初に、動名詞の種類をみてみることにする。これについては『現代英文法講義』(安藤貞雄:開拓社)に詳しく述べられているが、同書を参考にその主な特徴をまとめてみると、以下のようなろう。

I. 名詞的動名詞(名詞として世間一般に認知されており、多くは辞書に載せられている。)

1. 限定詞(冠詞・所有格・thisなどの指示形容詞・数量詞など)を置くことが多い。
We had a rough **crossing** from Kobe to Yokohama. (神戸から横浜まで荒れた海を航行した。)
ただし、抽象性が強いものは無冠詞で用いる。
Gambling has no attraction for me. (私はギャンブルには全く興味がない。)
2. 形容詞によって修飾することができる。
Reckless **spending** could beggar the country. (むちゃな浪費は国を貧しくしかねない。)
3. 目的語を直接にはとれず、ofを入れる。
The **taking** of human life is not permissible in any circumstances. (人命を奪うことはいかなる事情でも許されない。)
You must go to the original for a true **understanding** of the meaning.
(本当の意味を理解するには原文によらなければならない。)
4. 複数形にできる。
5. 意味上の主語は所有格で。

II. 動詞的動名詞(抽象的な性格を名詞的動名詞よりも強く残しているため、抽象名詞に似た扱いとなる。)

1. 限定詞はとらない。
Far from **despising**, I greatly respect her. (軽蔑するどころか、私は彼女を大いに尊敬している。)
2. 主に -ly 型の副詞によって修飾することができる。
Simply **pumping** public money into the railways is not the answer.
(公金を鉄道にただ単につぎこむだけでは解決にならない。)
3. 直接に目的語をとることができる。
Children learn by **imitating** their parents. (子供は親を手本にして学ぶ。)
Learning the **language** is key to **understanding** the culture. (文化を理解するためには言語の習得が不可欠である。)
of を介しない。
× writing of a letter × driving of a car
補語を伴うこともある。
Just **being** alive is wonderful! (生きているだけで素晴らしい。)
4. 複数形にはできない。
5. 意味上の主語は所有格もしくは目的格。ただし文頭では所有格が普通。

III. IとIIの混合型

限定詞と次のものを同時にとることができる: -ly 型の副詞・直接目的語・前置詞句・主格補語

例えば There is no **denying** his capability as a physician. 「医師としての彼の能力は確かなものである」の **denying** は、目的語をとりつつも **no** によって修飾されているので両方の性質を有する。(詳しくは同書の初版255頁を参照されたい。)

3の「限定詞+動名詞+of...」と「動名詞+目的語」の違いは重要なので念を押して述べるが、**the taking of human life** では **human life** は意味上は **taking** の目的語に相当するものだが、**taking** に **the** が先行して名詞的なために **of** を省略することはできない。他方 **taking human life** は動詞的動名詞なので **of** を介さずに目的語を直接とり、無冠詞である。注2・3

名詞的動名詞: ○ **the taking of human life** × **the taking human life**

動詞的動名詞: ○ **taking human life** × **taking of human life**

また、名詞的動名詞は形容詞によって、動詞的動名詞は副詞によって修飾できることから、前者は **the cruel taking of human life** 後者は **taking human life cruelly** となる。

『配分単数』

更に難しいのが、「配分単数」の扱いである。

Kangaroos are marsupials. 「カンガルーは有袋類である」は Kangaroos have a marsupial pouch. とすることもできる。しかし Kangaroos have marsupial pouches. とすれば、1頭のカンガルーが複数の育児嚢を有するかのような誤解を与えることになるため複数形にはしない。All flowers are subtended by a bract and two bracteoles. 「(ある種の)花は、全てが1枚の包葉と2枚の小包葉に包まれている」でも、a bract and two bracteoles だから説明になる。(この文は All the flowers.... の the を省略したものである。

⇒ 『特集10-3』の『注1』 また、All flowers are each subtended by.... と each を置いてよい。)

専門的・学術的な記述ではない文、例えば「彼らは高い鼻をしている」でも、They have a long nose. であって long noses とはしない。この文について『ジーニアス英和大辞典』では「この a は配分単数といい各人が1つずつの鼻をもっていることを明示的に表す。複数形にすると各人が複数個の鼻をもっている意と誤解される恐れがある」としている。

They have long noses. と書いても、常識からして「複数個の鼻をもっている」と誤解する人はいないと筆者は考える。現に Dogs have sharp noses. 「犬の鼻は鋭い」のような複数形での記述例も多くみられる。注2 しかし確かに、一瞬にせよ戸惑わせる(=複数個の鼻をもった人間を想像させてしまう)可能性であれば、無いとは言えない。したがってこのような「属性」を表す例では特に、相手が心に描く光景を考え、違和感を与えないように表現するのに越したことはない。

そのような誤解や違和感を与える心配がないのなら、例えば All children want presents on their birthdays. では複数形である。(また presents については、「願わくば複数個を期待する」ということなら複数形だが、「1個は」ということであれば a present がよい。) All children need warmth and affection from their families. や Children are taught reading and writing in their first years at school. といった例でも複数形である。

他方、Children may resemble both their father and their mother in different ways. や Subjects agree with their verb. 「動詞の単複は主語に合せる」の例では単数形である。このような例では単複どちらでも書くことができるが、All children need a special friend. では、「無二の親友」という意味では単数形が適切である。(もし、親友・心友はたくさんいるに越したことはないと言うのであれば special friends としてもよいかも知れないが、special という形容詞を friends という複数形名詞と共に用いることには自家撞着を感じなくもない。また、数とは無関係に、不定冠詞によって「～の種類…」ということを行わんとすることも多いが、それについては『特集11-8』の後半から述べる。) なお、Discourse markers usually come at the beginning of sentences. のような成句も複数形の beginnings にする必要はない。(discourse marker = 断定を避けるための well や「ためらい」を表す oh などの interjection)

さて、これよりも厄介なのは「彼らは絵を描いている」のような例である。この日本語も、単数か複数かの情報伝達という点では曖昧であるにもかかわらず、日本語としては自然である。しかしこれも英語になると a picture か pictures かのどちらかにせざるを得ない。

I'm painting a picture. か I'm painting pictures. かで迷う日本人はまずいないが、They are painting a picture. と They are painting pictures. の違いとなると、そう単純なものではない。「それぞれが一枚ずつ描いている」ことを伝えたいときは、上記の「配分単数」の例に倣うならば They are painting a picture. でよさそうな気がするが、この文はまた「一枚の絵を皆で仕上げている」とも解釈されてしまうことは明らかである。

結論を言えば、They are painting a picture. は「配分単数」のケースとは逆に、「一枚の絵を皆で仕上げている」と解釈するのが普通である。もっと明確な例で言えば Children were flying a kite. なら「一枚の凧を子供たちみんなで」と迷わず理解するように。

他方、Children were flying their kites. では、それぞれが一枚ずつ凧を上げていたわけであって、それぞれが複数枚の凧を上げていたという光景を思い浮かべる人はまずめったにいない。これと同じく「それぞれが一枚ずつ描いている」のなら They are painting pictures. が正解である。

ところで、もし画家だったら、同時に複数の絵を製作しているのはむしろ普通だろうから、この文で「それぞれが複数枚の絵を描いている」ことを表すことも十分にあり得ることになる。また、そのような特殊な例ではなくとも、They noshed peanuts and cookies while watching television. でも、それぞれがピーナッツ1粒とクッキー1枚だけしかつままなかったと思う人の方がまれである。

そしてまた They are painting pictures. では、「それぞれが」ではなく、「皆で複数枚の絵を仕上げている」ことを言うこともある。例えば、劇の書き割りなどを「彼ら」が描いていて、相手もそのことを知っているとなれば、そのように理解するはずである。

結局のところ、これらの文意が誤解なく伝わるためには、文脈やその場の状況、あるいは会話の当事者間での以心伝的な要素が必要である。そのような条件を満たしていないときにこれらの文を単独で用いると相手が単複を誤解する可能性がある。正確を期したいのなら、「彼らは(皆で)一枚の絵を描いている」例では together を用いるか one large picture とするなどの配慮が必要である。あるいは、皆で複数枚の絵を仕上げているのなら They are working together to finish painting some pictures. というのもよいだろう。

そして「それぞれが一枚ずつ絵を描いている」ことをより明確にしたいときは They are each painting a picture. とし、それぞれが複数枚の絵を描いていることを明確にしたいときは They are each painting some pictures. とすればよい。

このように、each は文意を明確にするのに極めて有効である。以下の意味の違いに注意。

I sent them a present. (全員に対してまとめて1個)

I sent them each a present. = I sent each of them a present. (それぞれに1個ずつ)

They have their own room. (共同で使える部屋が1部屋)

They each have their own room. = Each of them has their own room. (それぞれに個室)

cf. They have their own rooms. でも普通は「それぞれに個室」だが、「共同で使える部屋が数部屋」である可能性も残す。

Those flowers cost 500 yen. (総額で500円)

Those flowers cost 500 yen each. = Each of those flowers costs 500 yen. (一輪が500円) ※代名詞の場合は単数扱いが普通。

Standing by and doing nothing is the same thing as supporting it. (何もしないで傍観することは支持することに等しい。)

Time and tide wait for no man. (歳月人を待たず。) 「時間」と「潮の干満」なので別ものとして扱っている。

Poverty and corruption bedevil our nation. (貧困と腐敗が国民を苦しめている。)

cf. Your fairness and your impartiality have been much appreciated. 「君の公正さと公平さは高く評価されている」では所有格を繰り返すことによって個々の要素が強調されるため複数扱いにする。⇒『特集12-6』の『注2』

Bread and butter is enough for me. (バターを塗ったパンだけでけっこうです。)

Oil and water separate out. (水と油は分離する。)

cf. There is no bread, no butter, no cheese, no nothing. 「パンもバターもチーズも何もない」では物質名詞を並べてはいるが are ではなく is にしている。結局そのどれも無いのだから上の例のような区別は不要であるというのが主因であろう。

副因としては、例えば There are an apple and an orange on the table. では、an orange を追加的に述べる感じで (または an につられて) are を is にすることもありますが、それに近い感じもあろう。⇒『特集12-12』の『注1』

cf. A hospital and a medical school are one integral group. 「病院と医科大学とは1つの複合体である」の例では、建物も組織も別ものなので、やはり複数扱いが妥当である。

金額・時間[期間]・距離・量などに関する次のような例でも、ひとまとめとして扱う。

Five miles is too far for little children to walk. (5マイルは小さい子供には遠すぎて歩けない。)

It's been a difficult nine years. When do you intend to repay that five dollars ?

Fifty milliliters of rain was recorded in the period of an hour to 11 p.m.

※ 余談ながら、算用数字 (=アラビア数字) の表記のルールでは、「10までの数は綴る」「10を超える数でも、文頭にくる場合には普通は綴る」。ただし、単位と共に表す場合には綴らない。to the point 9m from the upper stream (上流から9mまで) なお、数字に関するその他の規則を注3に記載しているので参照されたい。

ところで、A [One] month and a half has passed since we last met. 「前に会ってから一か月半たった」を、同意の One and a half months have passed... では複数動詞で受ける。これは、動詞に近いほうの名詞 (この場合、前者では a half、後者では months) に合わせる傾向が強いからである。More than one teacher was present. 「2人以上の先生が出席した」などのような例でも同じ。⇒注4

また『教師のためのロイヤル英文法』では、「ひとまとめ」の例外を英米の文法書から次のように紹介している。

●主語が何かの一定量を表す数であるとき、動詞は単数の場合が最も多いが、複数の概念が重要な場合は複数動詞が用いられることもある。

The first fifty years are the hardest. [Roberts 282]

以下にも、単数と複数のいずれで扱うべきかに関する例を挙げる。

What is needed ... は The thing which is needed ... のことだから、これを主部にするのなら What is needed is books. が正しい。ただし、この例のように補語が複数だと What is needed are books. と複数扱いにすることもある。その場合は Books are what is needed. の倒置形と考えるべきであろう。しかし What are needed を主部にするのなら The things which are needed ... のことなので What are needed are books. が正しい。これを What are needed is books. とすることはできない。

また例えば、What S need(s) ... の What はこれ自体では単複不明だが、集合的にひとまとめにして単数扱いにしている例が多い。しかし、補語が複数なら are でもよい。What they need is [are] competent managers. 補語を列挙させるのなら複数扱いである。What we need for the present are ... and.... (差し当たり必要なものは、～と～である。)

cf. All you need is a certain amount of patience. のような例における代名詞の All は抽象的に単数扱い。

これは All is lost. 「万事休す」や All was quiet in the room. 「その部屋の中は静まりかえっていた」のような例でも同じである。他方、「あらゆるもの[人]」の意なら複数扱い。All were quiet in the room. (全員が静かだった)

この他、複数形で表す国家や機関などについても、一つの組織・体制と考えるので単数扱いが普通である。

The United States is bounded on the north by Canada. (米国は北はカナダと接している。)

The United Nations was set up after two wars involving the worst carnage imaginable to try and prevent a repeat.

(史上最悪の大虐殺が行われた先の二大大戦の後に、二度と戦争を繰り返さないために国連が創設された。)

他方、地形・地勢に関する地理的名称で広範囲にわたるものは、その複数の構成要素を意識して複数扱いにする。山脈や島嶼群などをいう場合がそれにあたる。⇒『特集10-2』

The Himalayas inspire awe and reverence. (ヒマラヤ山脈は畏怖と崇敬の念を起こす。)

The Philippines are made up of a great number of islands, large and small. (フィリピン諸島は大小多数の島々から成る。)

cf. The Philippines is one of the recipient countries of Japanese foreign aid.

(フィリピンは日本の対外援助受け入れ国の一つである。)

「一体としてとらえるもの」の定冠詞の例

- the bread and butter* of a company (会社の主体事業) 注2
the house and contents (家屋と家財)
the flower and choice of the country (国の選り抜きの人々 [精華])
the care and management of the animal (その動物の保護と取り扱い方法)
the plants and animals indigenous to Japan (日本固有の動植物)
the names and addresses of taxpayers (納税者の氏名と住所)
the diseases and disasters that afflict mankind (人類を悩ます疾病と災害)
in the infancy of *the arts and sciences* (学芸の揺らん期に)
in the days of *the telephone and telegraph* (電話と電報の時代に)
the nature and amount of the pollutant (汚染物質の性質と量)
the make, model, and year of the car (その車の機種・型・製造年)
the pain and anger he saw in the teacher's eyes (その教師の目から彼が読み取ることができた苦痛と怒り)
the anguish and madness of the contemporary world (現代世界の苦悩と狂気)
the pleasures and pains of growing up (大人になる喜びと悲しみ)
the idea and practice of nonviolence with which Gandhi is most frequently associated
(ガンジーと聞けばよく連想される非暴力の考え方とその実践)
- The editor and publisher* of this magazine is my father. 「編集者兼発行人」のような例は本特集の『その3』(特集12-7)で詳述する。

対立する概念であっても、そのことを特に明確にする気持ちがなければ and のあとの冠詞等は省略できる。

- the rise and fall* of nations (民族の盛衰)
the sweets and bitters of life (人生の苦楽) = *the sweet and (the) bitter* of life
(「the+形容詞」の場合の the の反復は『特集12-7』の後半を参照。)
the good points and bad points of a plan (計画の長所と欠点) = *the good and bad points* of a plan
The merits and demerits of the policy offset each other. (その政策は功罪相半ばする。)
They had a fight over *the rights and wrongs* of the matter. (彼らはそのことの善悪をめぐって論争した。)
the rights and duties incident to a settled estate (制限付き不動産権に付帯する権利義務)
※ *rights and duties* はこのように一体のものとして扱うのが普通。

『*the first and the second chapter* = *the first and second chapters* のような、and が形容詞をつなぐパターンについて』は本特集の『その5』(特集12-10)を参照されたい。

このことは or にも言える。or の場合には冠詞を繰り返すことの方が多いが、省略することもある。

繰り返す例

- answer with *a yes or a no*
Is this glove *a right or a left*? (この手袋は右手か左手か。)
Are you *a man or a mouse*? (あなた、一人前の男なの、それともただの臆病者なの。)
A lawyer or a doctor is a professional man. (法律家や医者とは専門の職業人である。)
Which came first, *the chicken or the egg*? (ニワトリと卵ではどちらが先か。)
Is this plant classified as *a moss or a lichen*? (この植物は苔類と地衣類のどちらに分類されますか。)
He doesn't have *a television or a video*. (彼はテレビもビデオも持っていない。)
Is he playing *a clarinet or a trombone*?
A diamond is 140 times as hard as *a ruby or a sapphire*. (ダイヤモンドはルビーやサファイアの140倍も硬い。)
I wonder if a tomato is *a vegetable or a fruit*.
There never was *a good war or a bad peace*. (いまだかつてよい戦争も悪い平和もなかった。)
The question cannot be lightly dismissed as *a fad or a dream*.
(この問題は気まぐれだとか空想だとか言ってあっさり片づけるわけにはいかない。)
Is it *a he or a she*? (男か女か。)
※ 性別が不明の場合には、人に対しても it が用いられる。
“My sister is going to have a baby.” “Congratulations. Do you know if *it* will be a boy or a girl?”

特集 1 2 冠詞等を反復させるか否か その3 その他の注意点(繰り返すか否かで意味が異なる例など)

「同種あるいは対等のものなどを列記する場合に、個別の要素や区別・対比を強調する意図がなく、文脈からも誤解のおそれなければ冠詞等を反復させる必要はない」ことはすでに『その1』で述べた。例えば *He is a statesman and poet.* では、*He* に対する補語となっていることが明らかなので、「詩人でもある」ことを強調する場合を除いて冠詞を繰り返す必要はない。(強調する例は前々頁の②を参照。)

※ しかし、次のように主語にする場合には注意を要する。

A statesman and poet came to the party. (政治家でもあり詩人でもある一人の男が……)

A statesman and a poet came to the party. (一人の政治家と一人の詩人が……)

ただし、*A doctor and a nurse tended the injured.* では、*A doctor and nurse....* と冠詞を省略しても、「医師兼看護師」は考えにくいいため誤解は生じない。

また *be*-動詞を用いれば複数であることを明示できるので *A statesman and poet were present at the party.* も可能ではあるが、*A statesman and a poet were....* や *A statesman and poet were both....* とする方が親切な表現である。

※ また *both ... and ...*, *between ... and ...* などでは、個別の要素や区別・対比を強調すればそれぞれに冠詞を置くが、この構文ではまた、ペアとなるものを扱うことが多いために、対句における冠詞の省略(⇒『特集1 3-4』)がなされることも多い。

He is both a scholar and (a) poet. (学者であり詩人でもある)

a friendship between a boy and a girl (少年と少女の友情)

Nature endowed her with both a sound mind and a sound body. (彼女は生まれながらに健全な精神と肉体に恵まれていた。)

an exchange of rings between bride and groom (新郎新婦の指輪交換)

the difference between good and evil (善と悪との相違)

Both mother and child are doing well. (母子ともに健康。)

There was some soreness between father and son. (父子の間に感情の行き違いがあった。)

a profound difference between the dream and reality of American life (米国での生活の夢と現実との深い相違)

※ 名詞をつなぐ *of* の働きが異なる場合には、冠詞等を反復させる方がよい。

the love and fear of God (神を愛し恐れること) : 共に「目的語関係」

the arrest and deportation of all its bishops (司教らの逮捕と国外追放) : 共に「目的語関係」

The fear and the reality of crime constrict people's lives.

(犯罪に対する恐怖心、また犯罪のひどい現状によって、人々の生活は萎縮してしまう。) : 「目的語関係」と「同格関係」

※ 「*the*+形容詞」が *and* で結ばれても、一つのもの[そのような人々]を表すときは *the* を繰り返さない。また、同類・同種のものをつなぐ場合にも *the* は繰り返さない傾向が強い。

the sick and wounded (傷病者たち) *the deaf and dumb* (聾啞者たち) *the poor and needy* (貧窮者たち)

the rich and famous (金持ちの名士たち) *the handicapped and housebound* (障害をもって外出できない人たち)

これに対して、区別・対比を強調する場合には *the* を繰り返すことが多い。これは『3. i. b. 対照的な二つのもののうちの一方であることを表す』(本編『the 3-14』)からである。

the dead and the living (死んだ人たちと生きている人たち) *the dying and the dead* (死にかけている人々と死んだ人々)

the affluent and the needy (富者と貧者) *the strong and the weak* (強者と弱者) *the ideal and the real* (理想と現実)

ただしこれも絶対的な決まりごとではなく、*the* を繰り返さなくとも容易に区別できる場合や、上の例のような強調をする気がない場合には後ろの *the* は省かれる。

the dead and (the) injured [*the killed and wounded*] (死傷者)

The good and bad are all mixed up. (玉石混淆だ。)

3つ以上のものを並べる場合には、*the* を繰り返さなければわかりにくい。

the true, the good, and the beautiful (真・善・美)

the sublime, the beautiful, and the good (荘厳と美と善)

the old, the disabled, and the sick (老人と身体障害者と病人)

例えば *the killed and wounded* では *the* を繰り返さなくとも「死者及び怪我をした人たち」のことであるのは明白である。

また *the sick and wounded* 「傷病者たち」では、負傷した病人もいるだろうから、病人と怪我人とをことさらに分ける必要は普通は無いが、もしその必要があるのなら *the* を繰り返せばよい。*the rich and famous* 「金持ちの名士たち」では、本来は「金持ち」=「名士」とは限らないので、例えば金持ちの集団が名士たちを招待するパーティーなら *the rich and the famous* が集うことになる。

the sick and the elderly (病人及び年配の人たち) cf. *sick elderly people* (病気を抱えた年配の人たち)

特集 14 人名・肩書き等と冠詞 その1 補語の例など

補語にあたる名詞で、特殊な地位・役職を表す名詞（特に団体の長を表す名詞）は普通は無冠詞で用いる。

He was *president* of the Northern Pacific Railroads.

Bush was elected *President*. = Bush was elected to the Presidency.

I was elected *chairman* [*chairwoman*]. = I was elected (to the) chair. chair ⇒ 本編『the 3-34』の『注2』

Harrington was *CEO* [*president*] of St. Anthony Community Hospital since....

He is *Prime Minister*, and therefore has a duty to....

Mairead's father Liam is *principal* of Rice College in Westport.

He was *headmaster* of a public school in the West of England. ⇒ 本編『the 4-4』の『注1』

The committee elected him *chairman*.

The President named him *Secretary* of Defense. (大統領は彼を国防長官に任命した。)

I became *chairperson* on the spur of the moment. (物の弾みで委員長になってしまった。)

He was elected *governor* of the State of Alabama. (彼はアラバマ州の知事に選ばれた。)

He became *principal private secretary* and worked on the privatisation programme. (第一秘書になり民営化に取り組んだ)

turn のような自動詞の補語となる場合も普通は無冠詞である。

The teacher turned *politician*. (その教師は政治家になった。)

John started out a music student before he turned *linguist*. (ジョンは最初は音楽専攻の学生だったが言語学者になった。)

この理由は形容詞的な性質が強まるためであるとする説があるが、『英語の冠詞がわかる本』（正保富三：研究社）の次の記述がより参考になろう。

「官職・身分を表わす語が補語として使われたときは冠詞をつけない」という原則がある。…中略…

官職・身分を表わす語がこの用法で使われるのは、それらの語が表わす意味が「市長」とか「委員長」などという個々の人物のことでなくて、その役職を表わす抽象的な概念だからである。「市長」「委員長」は世の中に何人もいるが、その市の市長はひとりであり、その委員会の委員長はひとりである。ただ1つしかない役職を数えるということは意味をなさない。したがって、これらの語はそのコンテキストでは不可算名詞となる。

原則に反して *the* を置くことはあるが、その場合、*the* が置かれている方を主語（文型はCVS）と考えることもできる。『英語の冠詞がわかる本』では He is *president* of this company. と He is *the president* of this company. の例について、前者を「彼が何の役職についているかを述べる文」、後者を「『この会社の社長は彼だ』という言い方」としている。つまり、後者は「社長という人物」に重きを置いたものである。

ちなみに『ユースプログレッシブ英和辞典』では「補語に用いる場合はふつう無冠詞」の例として He is *principal* of a high school. を挙げているが、*a high school* と高校を不特定にすることによって、前出した内容を受けず、また強調もしにくいように配慮している。つまり、「(固有名詞の) ABC 高校の校長」なら強調して He is *the principal* of ABC High School. とすることもあるが、「とある高校の校長」を敢えて強調することは考えにくいからである。

ただし *of* 以下が不特定のもを表しても、例えば Kenneth Koch is *the godfather* of *a* literary movement.... ということはできる。「とある文学活動を一人で率いていた人物」と言うためである。次の例も同じ。

The leader of *a* protest group.... One old man, probably *the leader* of *a* village,

リーダーは複数人いることもあるので、このような *the* の使用は唯一性を表すのに有効である。一人であることがわかりきっている「校長」の例とはその点が異なる。

また、特殊な地位・役職を表す名詞は一人しかその職に就けないものとは限らず、例えば国会議員・大臣・教授なども無冠詞で用いることはできるが、これらも大勢の人がその職に就けるわけではない特殊な職業である。ただし例えば「財務大臣」では、他の大臣との区別・対比を強く言う必要があれば *the* を置くし、そういう肩書きをもった一人の人物ということを重視すれば *a* を置くため、このような例では、無冠詞が原則というわけではない。

be elected a Diet member ... was elected a Member of Parliament. ... was elected Member of Parliament.

He was *Minister* of State at the Department of....

She is *the Minister* of Education and Social Affairs. (彼女は教育および社会問題の担当大臣だ。)

He was *professor* of painting to the Royal Academy. (彼はロイヤルアカデミーで絵画の教授をしていた。)

He is *a professor* of economics at [of] Indiana University. (彼はインディアナ大学の経済学の教授です。)

※ *of* だと「～に所属している」という意味合いが強い。⇒ 本編『the 4-4』の『注2』

特集 15 「The 比較級 ..., the 比較級....」の構文に関する注意点 注1

この構文は比較的簡単ではあるが、いざ英訳するとなると戸惑うものである。何を比較級にし、どう用いるのかを考えることが肝要である。具体的には、「補語としての形容詞」か「形容詞+名詞」か、それとも副詞か。そしてその役目は何か。目的語か補語か主語か、語の修飾語（形容詞）か、副詞なら文・動詞を修飾しているのか、それとも形容詞・分詞・副詞を修飾しているのか。あるいはまた、moreなどを代名詞として用いるのか、等々。

大学受験生などが犯しがちなのは、「形容詞+名詞」の場合に「比較級の形容詞+名詞」とひとまとめにすべきところを副詞の比較級にして名詞と離してしまう誤りや、形容詞・分詞と副詞を一体とすべきところを、副詞だけを前に出すといった誤りである。⇒『特集 15-3』

- *The more information you have, the more effectively you use the system.*
- × *The more you have information, ...*
- *The older he grew, the more interested he was in poetry.*
- × *..., the more he was interested in poetry.*

以下、参考のために多くの例文を載せる。（なお、未来のことを言っても副詞節は現在時制にする。）

The older we get, the weaker our memory grows. [= *As we get older, ...*]（年をとればとるほど、記憶力は弱まる。）

The less you study, the less you ('ll) learn.（勉強が少なければ身につく学問も少ない。）

The bigger they are, the harder they fall.（大きければ大きいほど落ち方が激しい。）

The nearer one is to death, the more greedy one becomes.（「死に欲」というものが出るものだ。）

The harder he is pushed, the more obstinate he becomes.（せきたてられると彼はますます頑固になる。）

The warmer a place is, generally speaking, the more types of plants and animals it will usually support.

（温暖な地ほど動植物の種類が増えるのがふつうである。）

Well, the fairer skinned you are, the easier you sunburn, the more poorly you tan, the higher your risk.

（肌の色が白いほど日焼けしやすいし、また、日焼けをしていない人ほど日焼けしやすい。）

The more I hear about the company, the less I like its articles.（その会社の評判を聞けば聞くほど、製品も嫌いになる。）

The more there is to do, the smoother things will go. = *The more work, the better.*

（多々ますます弁ず。[多々ますます善し。]）

The more he flatters me, the less I like him.（彼が私にへつらえばへつらうほど嫌いになる。）

The more serious one is, the more liable one is to bouts of depression.（まじめな人ほどスランプに陥りやすい。）

The more (self-)confident one is, the more likely one is to make that kind of mistake.

（自信がある人ほどそのような間違いを犯しやすい。）

The more she remembers, the more bitter she feels about what has happened.

（思い出せば出すほど、彼女は起きたことを辛く感じる。）

The more lacking in substance a person is, the more he desires to build a facade.（中身の貧弱な人ほど体裁を飾りたがる。）

The more conscious she is of her readers, the more ordinary her novels become year by year.

（読者を意識するあまり、彼女の小説は年々凡庸になっていく。）

The longer you live, the more people you see into the grave.（長生きをすればそれだけ多くの人を見送ることになる。）

The longer you put it off, the less you will want to do it [the less inclined you will be to do it].

（先に延ばせば延ばすほど、それをするのが嫌になるよ。）

The longer a habit continues, the more difficult it is to change.（習慣が長く続けば続くほど、容易にはそれを変えられない。）

changeの後ろの目的語 it が省かれている。次の例でも同じ。

The more complex the structure, the harder it is to copy.（構造が複雑なものほどコピーするのは難しい。）

以下は主語の例

（主語の例はそう多くはない。例えば *The more we talked, the wider the gulf opened between us.* 「話し合うほどに溝は深まった」の例は ..., *the wider gulf opened between us.* と簡略化できるが、前者の書きの方が主流である。

また例えば *The more | exercise is taken, ...* とポーズを入れるのなら前者の例と同じだが、入れなければ主語の例に該当する。）

The more you succeed, the more is expected of you.（成功すればするほど、さらに多くのことを期待されるものだ。）

The nastier criticism is, the more readers lap it up.（批判は辛辣であればあるほど読者受けする。）

The more the city burned, the more oxygen was sucked in — and the greater the firestorm became.

（その都市の火災は周辺地域の酸素を奪いながら勢いを増し、火事場嵐はさらに大きくなった。）

The more stringent conditions are forced on you, the greater ability you can show as an architect.

（条件が厳しいほど建築家としての力量を発揮できる。）

The greater the cross-sectional area of a muscle, the more force will be generated.

（筋肉は断面積が大きいほど強い。）

The more exercise is taken, within a normal lifestyle, the greater the health benefit.

（日常生活では運動量が多いほど体にはよい。）